

浄土

1983-11

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一編 一頁 一冊
昭和二十四年四月二十八日 遷轉省 (特別郵便物認可) 第三二五号
昭和五十八年十月二十五日印刷 昭和五十八年十一月一日發行
第四十九卷 十一月分



- 晚

紋 -

三 西 大

昭和59年度版

浄 土 宝 暦

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和59年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な権信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 32ページ

1部単価 65円 (200部以上 60円)

送料実費 (400部以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであ
らかじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

.....お申込み.....

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187

十一月号



衆の為に法蔵を開いて広く功德の
宝を施し、常に大衆の中に於て、
説法師子吼したもう。

——『無量寿経』四誓偈

目 次

法 話

秋・熟・老……………山 田 察 彦……(2)

梅尾断想 一和して同ぜず……………小 俣 昌 雄……(7)

たのしいお十夜……………大 室 了 皓……(12)

野島老師のことども……………高 島 昭 堂……(24)

(一)(口)(法)(話) = 最終回 =

故人のための念仏回向……………村 瀬 秀 雄……(22)

偶 感

——青少年の教育と宗教——……………大 橋 英 正 ……(16)

エッセイ 卒業式前後(≡)……………木 下 隆 一……(34)

お十夜風物誌(下)

——勝ち関念仏の寺——……………柴 田 六五郎……(30)

凶教行軍日軍

十一月の行事……………鷺 見 定 信……(44)

◇◇寺内大吉先生に毎日出版文化賞◇◇……………(42)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(40)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

法 話

秋・熟・老



秋といってもそのあらわれ方はところによって一様ではない。海洋性気候の日本と内陸性気候のチベットやモンゴルとは同じでなく、平地と高原、降雨量の多少などにも強く左右される。

雨の極端に少ないところでの秋は文字通り

山^{やま}田^だ察^{さつ}彦^{げん}

(亀山市浄源寺住職)

の碧空が気の遠くなりそうな幽幻さで人にせまり、適度の湿潤に恵まれる日本などは、流れる雲に詩情を施すことも出来るが、度を越すとしとしとと肌寒い「秋雨」「霖雨」がつづいて悲哀の感情をかき立てられることもある。

“秋・深し”——初秋、中秋、晩秋と秋は次第にその光りと色をかえて人によびかける夏の名残りをぬけきれない初秋、そして、晩秋ともなれば「初冬」との区切りはつけ難くなるがその変化のリズムは決して狂うことがない。

秋と人生

人の一生はよく四季にたとえられる。“青春”ということばのとおり、双葉と花の時期、たくましい太陽のエネルギーに象徴される灼熱の夏をすぎて、清涼成熟の秋を迎え、さらに枯淡と静寂の老年は冬に相当する。

「熟年」ということばが流行するようになったのはいつ頃からだろうか。おそらくまだ十年にもなるまい。誰れが使いはじめたのか知らないが、昔そんなことばは無かったと思われる。

“熟年旅行”などといわれるところからみると、これはどうやらマスコミと一部の文化人と称する連中に、観光業者が便乗して合成されたものと思えなくもない。

“醇熟” “熟成” というのは昔からよく使われたし、“円熟” といえば、文字どおり、「円満成熟」の人柄を指す。「熟」とは元来「老」の意である。「老年」といえば生理的には「老人」をさし、「老年者」といえば、「若年者」と対象的に用いられるが、「老」とはあらゆる人生の経験を積み人格的に円満成熟した姿であり、「老大人」「老和尚」などの語は円熟した人格者に対する最大級の敬称なのである。

従って——「熟」は「老」の肉面的充実さを用いるのであるから、何も今更ら、世間でいうように壮年と老年の中間など、区別することはないのである。

だから、私は「熟年」などということばになじまないし、それを使うことに抵抗を感じず

る。何に抵抗を感じるかといえ、その一般的使用の輕薄さであり、「老年」というよりは「熟年」と呼ぶ方が耳ざわりがよく、おだてやすい——という安直な商業性にある。あなたはまだまだ老年ではありませんよ。花も実もある「熟年」ですよ——というくすぐりとおだてである。

花も実もある——ということは、はたしてどんなことをいうのであろうか。

老人

四十五年前の、ちょうど今ごろ——私は支の戦線にあった。中国の一大穀倉ともいわれる湖北の平野は豊饒の秋を迎えていた。それは文字どおり、「湖広実らば天下飢えず」のことわざどおり、見はるかす山野のすべては戦火をよそに黄金の波を打たせていた。

しかし、その間を武漢を目ざして進撃する怒濤の軍靴で、至るところ黄金色の穂は踏み

しだかれ、泥土にまみれた。

前線が遠ざかり、銃砲声がしなくなると、どこからともなく農民たちが帰って来て、倒された穂に取りこんで刈取りをはじめた。

私の中隊にMという三十を少し越えた朴直そのもののような応召の兵隊がいた。彼れは軍務の余暇をみては、せっせと中国人の農民たちの中に入って土にまみれた稲穂の刈取りに精を出した。来る日も来る日も汗を流して刈取りを手伝う彼れに対して農民たちは口々に、「老人」とよんだ。中隊では一等兵の一人として何のとりえもない目立たない存在にすぎなかった彼れではあったが——

そして、これは昨年のことである。——私は会葬のため、とある田舎の村に出かけた。往路は駅からタクシーを利用したが、帰途は駅は見えていることでもあるし、タクシーの電話もわからないまま歩くことにした。たまには歩くことも運動によいと思って田舎道を

歩き出したものである。ところが見えていると思った駅はなかなか遙か彼方のようである。しばらくして老人に出合ったので駅までの道のりを聞いたところ三キロぐらいあるとのこと、この道を行けばよいと、さっさと行ってしまった。

三キロとはとんだ誤算であった。せいぜい一キロぐらいと予測して乗車する列車も予定していたし、その列車に乗れないと次ぎの接続に大きなロスが出る。私はいささかあわてた。寒い時期ではあったが汗をかいていた。

しばらく小走りにいそぐ私の前に野良婦りの子供を背にした若い主婦があらわれた。私の関心は予定の列車に間にあうかどうか、駅まで何分かかるか、近道はあるのかどうかについて矢つぎ早やに彼女にたずねた。彼女は「今、何分ですか」と私に聞いて、手とりばやく要領よく近道まで案内してくれ、急がねば間に合わない」と親切に教えてくれた。おかげで駅の階段をかけ上ると、列車がホー

ムに入るのが同じで、切符も買わずにとび乗ることができた。

私は、汗をふきふきさっきの若い主婦に心の中で手を合わせた。そして、若い人に似合わない行き届いた親切に老大人の心くばりを感じたのであった。

熟柿

秋といえば柿を思う。私はことのほか柿が好物である。胃腸にはよくないのであるが、喰べ出すと目がなない。ことに年をとってからというものは、固い柿よりも少しやわらかくなりかけの甘みのしっとりとしたものがこたえられない。しかしである。問題はその硬度なのである。サクサクと歯切れのよいのは甘味が充分でなく、といって今にも枝からポタリと落ちそうな、手をふれたらつづぶれそうなブヨブヨになってしまったものは、これまた

論外である。しいていえば固さがやわらかさ
に変わる微妙な一瞬に醍醐味がある。

熟柿になりきってしまったものにはもう魅力
はない。それは「過熟」であり「老醜」を
感じさせられるからである。

私はここに結実のむつかしさというか、その
「限界」をみるのである。それはとりもなおさず「老」にせよ、「熟」にせよ、一定の
規矩が厳として存在するということをである。

つまり、「円熟」はよいがそれも度を越しては
価値を損ずるわけで、そこから、考えられることは「熟度の調節」である。しかし、
これはなかなかむつかしい。というのは、その
調節や調整が自律的に行なわれるためには
「分を知る——おのれを知る」ことが何よりの
前提となるからである。そしてその根元となる
ものは仏教的な「思惟」である。そして
「思惟」は「応観法界性、一切唯心造」の世界
なのである。

人間にとって何よりも大切な品性は二にも
二にも謙虚の一言につきる。ところが、宣伝
顯示性だけが優越する現代においては、この
ことは死語に近い。これでもかこれでもか
というあくどいPR、実力以上に自分を誘示
せんとする妄動さ、一度、手に入れたものは、
誰れがどういおうが手離さないという貪
慾さ、そういったものが滔々として現代を支
配しているありさまは、すべてこれ「思惟」
の欠如からくる。

春や夏は人間の進む姿であるが、秋は冬と
ともに人々に「退く」ことの大切さを教える
のであって、前進また前進の一本槍では、必
ずいつの日か大きな破綻と「ひずみ」に見舞
われ、その増幅はやがて破滅とつながるであ
らう。

法 話

杵尾断想 — 和して同ぜず —



十月下旬から十一月にかけては、紅葉の季節です。その美しさは「万山錦を織るがごとし」というように、それぞれの木の葉が、微妙に色を分け合って、複雑な色の世界をつくり出すところにあります。

紅葉の名所は、全国至るところにあります。京都では、高雄の神護寺から、槇尾の西

明寺を経て、杵尾の高山寺に至る辺りの、所謂、三尾の地が、昔から紅葉の美しいことで、とりわけ有名です。私も何度か訪ねています。

神護寺の山裾を流れる清滝川の溪流をはさんで、茶店がならび、槇尾の少しひらけた所には緋毛氈の縁台が、あちこちに設けられ、

小 侯 昌 雄

(東京・品川区行慶寺住職)

また、高山寺への崖沿いの道にも、掛け茶屋が出て、たいへんな賑いです。

ここは楓が中心であることと、この土地の気象条件によるといわれていますが、その葉が明るく緋色に染って、他の深紅の葉などと照応し、そのあでやかさは、さすが比べようがありません。

ただ、余りにも沢山の人出であるうえに、車の往来も激しく、ゆっくり鑑賞しておられないのが、名所のもつ宿命とはいえ、つらいところです。

それに、さして広くもない高山寺の石水院が、人で埋るのも、本来のあるべき静寂の世界をこわしているようで、心を重くします。

○
しかし、この紅葉で賑わう三尾の地も、普段にいたって静かです。栂尾まで入る観光バスも少なく、五月の新緑の頃、他に人影もない石水院の縁先に、ただ独り坐って、心ゆく

ばかり清浄の気を味ったものです。

楓の幼い葉が、五月の風にゆれて、淡いみどりの光を、あたり一面に散らし、そこに身を置く者の心が、おのずと和むのも尊いことです。

○
神護寺へ詣るには、街道から細い道を下って、橋を渡り、それから急な坂の参詣道に登るのですから、私のような足弱の者には一苦労です。しかし、登りきって諸堂の寂然とした、そのただずまいに接しますと、ただそれだけで、百の説法に勝る感動を受けます。このあたりは、京都でも特に、私の好きな所です。

○
この神護寺や高山寺を訪ねて、いつも思うのは、文覚上人や明恵上人のことです。昔、それぞれ神護寺や高山寺に住職して、ともに、その寺の再興に尽力し、歴史上有名な人たちですが、私たちの宗祖法然上人とは

ほ同じ時代に、相前後して生きた人たちでありますので、法然上人を語る上でも欠くことが出来ません。

その経歴をみますと、法然上人と同じように、幼い時に親を失っており、仏門に入ってから、ひたむきな修業ぶりにも、お互いに相い通ずるものがありますが、その反面、それぞれ極めて個性ゆたかに、自己の信念に生きていますので、実際には随分違った道を歩んでいます。

○

文覚上人は、もと遠藤盛遠という武士ですが、十八歳の時、同僚の妻である袈裟御前に言い寄った末に、その夫を殺そうとして、その家にしのび入り、殺めたのが、身替りになった袈裟御前その人であったことに、はじめから自分を愧じ、走って寺に入り、激しい修行に打ち込むことになりました。そしてやがて、神護寺に入ったのです。

こうした経歴からもうかがえるように、この人には一種の一徹さと俠気があつて、或る時は、神護寺の復興を願つて、御所に押し入つたために、伊豆に流罪になったり、或は政治の改革を企てたとして、佐渡に流罪になったり、波瀾に富んだ生涯を送っています。

信念に生きることとは尊いことですが、佐渡に流罪になるに及んで、鎌倉幕府の上人に對する不信の念が、更に一つの悲劇を生むことになりました。

それは、平家滅亡の後、平維盛の嫡男である六代という人が、文覚上人の命乞いによつて助けられ、二十年近くを静かに神護寺に籠っていたにも拘らず、ついに捕えられて、鎌倉田越川のほとりで討ててしまったのです。行動の人としての上人に伴う悲しい一面がそこにあります。

この点、法然上人も、平師盛の子である勢観房源智上人を十三歳の時から、常隨の弟子として身近に置かれています。上人流罪の

折にも、源智上人にかくの事なく、法然上人没後も、引き続いて、その坊舎を守っており、五十八歳その寿を完うしています。

それは、源智上人の人柄もさること乍ら、法然上人が、いかに深く世間から、徳者として信頼されていたかを語るものです。

○

梶尾の明恵上人は、法然上人より四十歳ほど後輩に当りますが、栄西禪師が中国からもって来た茶の木を贈られて梶尾に植え、茶祖といわれています。梶尾の茶は本茶として大変尊重されています。

一昨年、この明恵上人の没後七五〇年を記念して、京都の国立博物館で、高山寺展が開かれまして、私も泊りがけて二日にわたって拝見しました。

明恵上人という人は、まことに純な、少年の、ういういしい心で、釈尊を渴仰し、その仏弟子として、求法の一念を生涯貫き通して

います。

或る時は、釈尊の捨身の故事にならって、死者を棄てる三昧原に、身を投げ出して、野犬の餌食になろうとしたり、また或る時は、自分の右耳をそぎ落してまで、世俗の念を断ち切ろうとしたり、更には、釈尊の遺跡を親しく訪ねようと渡印を再三企てるなど、求法のための、その一途な心には、頭がさがります。

明恵上人は、また、よく夢をみる人で、その夢のことを永年にわたって書き残していますが、岩波文庫の「明恵上人集」に、その夢記も収められています。

一昨年の高山寺展でも、この夢記が展示され、巻物の一部が開いてありましたが、それは法然上人のことを書いたところでした。

夢の中で、法然上人と会って、二三日を一緒に過した話ですが、明恵上人の書いた「摧邪輪」にも、「自分は、かねてから法然上人を深く仰信していた」と述べているくらいで

すから、法然上人の夢をみたのでしょう。

○

それなのに、法然上人没後「選択集」が世に出るに及んで、摧邪輪を著わして激しく非難したのは、仏弟子としての在り方について、その受けとめ方が違うところから来ているといえます。

或る本に、或る島のこどもたちが、自己流では充分に泳げるのに、教科で定めたクロールで泳ぐのが不得手のために、成績表では、中以下の評価になっている矛盾を取りあげていますが、このような評価の仕方は論外としても、第一、人間の値うちは、能力だけで決まるものではないはずです。心の問題があります。

ところが、明恵上人は、教科書通りに生きようとした真面目人間ですから、途中で挫折したり、誤りを繰り返す者は、許せなかったでしょう。

それを、法然上人は、悪人は悪人ながら、称えれば救われると説き、平重衡にも「罪深かければとて卑下し給うな」と語っているのですから、その真意を計らずに聞いたら、誤解することでしょう。法然上人にとっては、どれだけ修行を積んだか、ということより、現在の、その人の信心が大切なのです。ここに二人の違いがあります。

オーケストラの調和の妙は、それぞれの楽器の個性とその主張を認め合うことから生れますし、紅葉の美しさも、一葉毎にしっかりと紅葉することから生れます。

お念仏も、自分から信心して、自分の行として行じてゆくもので、基本は自分です。和して同ぜず、自分を見失うことのないよう、最近の没個性化の浪に押し流されないよう、お互いに気をつけたいものです。



たのしいお十夜

おおむろりょうこう
大室了皓

(大本山増上寺執事
東京・品川区光取寺住職)

○

あなたうと茶もだぶだぶと十夜かな

蕪村

十夜とて袖ふりあふもたのもしや

成実

お十夜法要に参詣し、おこもりをしたという庶民の姿が眼に見えるようだ。

田んぼの仕事も一段落し、

「おらがとこでは……」

と収穫の話に花を咲かせたり、畑仕事の苦しさも今は楽しい思い出となって、久し振りに会う人々と、

「白髪がふえたなあ」

「俺もさあ」

寺の本堂に集まった村人たちの楽しげな姿を、本尊さまは、やさしいお顔で、にっこりと包んでくださっている。

お説教が始まる。

テレビなどの娯楽もない昔だ。ただ集まって茶をくみかわし、野菜の煮物をつまみ、話し合うだけでも楽しいのに、御本山から立派なお坊さまがお越しになってのお

話を聞くことができる。

都のことだとか、各地のおもしろい、めずらしいことなども、お説教の中に出てくる。ちょうど、今の私たちが、外国の変った慣習・風物だとか、世界の時事情報などに耳を傾けるようなもの珍らしさで、じいっと聞きいったであらう。

そういう楽しい話などを折り込んで、お念仏の教えを布教師は説いていったに違いない。

終って帰る時には、

「ことしのお十夜もよかったなあ。また元気で働こうや」

空には、まあい十五夜の月が出て、明るく彼らの帰り道を照らしていただらう。

そうして仰ぐ満月が、仏さまにも見えてきて、ひとりでにお念仏が口から出てきたであらう。

丸ふなる月をかぞへて十夜かな

也有

十夜とてかしこき法の教かな

樗良

もろもろの愚者も月さす十夜哉

一茶

○
お十夜法要は、今では一日で済ましてしまうが、昔は十月六日から十五日の夜まで、十日十夜にわたって行なったものだ。

旧暦であるから、最後の十五日は満月の夜である。

阿弥陀さまに、いつもお守りいただいているその御恩を感じ、報恩の心をあらわし、さらに、これをつとめることによって、仏さまから功德をいただくとして行なった法要である。

無量寿經に、

「此に於いて、善を修すること、十日十夜すれば、他方諸仏の國中に於いて、善を為すこと、千歳なるに勝る」と説かれていることから始められた日本独自のものである。

今から五百五十年ほど前（室町時代）、將軍足利義教の執権である伊勢守平貞経の弟、貞国が深く弥陀の誓願に帰し、京都の天台宗の真如堂におこもりをして、三日三

夜、称名念仏したところ、無事に家督を相続することができたので、さらに七日七夜、報恩の念仏を修した、という。(真如堂縁起)

家督相続は、当時では一家の浮沈をかけた大事件であった。

執権の弟でもあれば、なおのこと、世の人々の関心も並々ならぬものがあつたらう。

彼は必死になつて八方に手を尽くしきつて、あとは、ひたすら弥陀に祈るしか道はなかったのだ。

生きるか死ぬかの瀬戸際に立った気持で、三日三夜、称名念仏に励んだのであろう。

それが叶つたのである。

彼が歓喜のあまり、涙にむせんだであらうことは想像に難くない。

それが報恩の行となつた。そしてさらに、七日七夜、堂にこもつて念仏した。み仏の有難さを、ひしひしと感じながら、喜びに包まれた日夜であつたらう。

善を修すること、それは念仏を称えることである。凡夫が、いわゆる善などできる筈がない。それが念仏の教えだ。彼はこのことを教えられていたがゆえに、仏の慈

悲と、念仏の功德を固く信じて、真如堂にこもつた。

無量寿経には、

「善を修すること(念仏を称えること)によつて、惡を攻め、生死の苦を抜き、五徳を得さしめて、大きな安らぎを与えられる」と説かれている。

お経の通りだった。彼の家督相続を妨害する惡人たちは駆逐され、お家の存続を危うくするものがなくなり、幸せを把むことができた。

彼は、その有難さを囲りの人に説いてまわつた。聞いた人々は、あらためて念仏を修すること(善を行なうこと)の功德に感動した。この話は、都中にひろがつて、貴賤男女、ひとしく、同じ勝縁にあづかろうとした、のではなからうか。

真如堂縁起には、

「これより、堂塔も供養し、末代にとて十夜の寄進寺中までも施物を請したり。その故、いよいよ、上意御感ありけり」

と記され、そして、諸人こぞつて参詣したとある。

以後、真如堂において、毎年、行なわれ、天台の慈覺

大師によって、比叡山の常行堂に伝えられる引声の阿弥陀経と、引声の念仏を誦した。

これをみるに、現世救済の念仏の功德をいただくことが、当時の十夜法要を修するねらいであったと思われる。

その後、明応四年（一四九五）、鎌倉光明寺の第八世、観誓祐崇上人が、後土御門天皇に招かれ、宮中で浄土の法門を説いたところ、御感を得て、天皇御筆の阿弥陀経一卷を賜わり、のち、再び宮中にて、真如堂の大衆を率いて十夜法要を行なったところ、さらに深く感動され、都を遠く離れた関東の鎌倉光明寺において、永くこれを修することを勅許されるに至ったのである。以後四百八十有余年、現在もお広く浄土宗寺院でいとなまれることになった。

新暦になっても十月、あるいは十一月に行なわれている浄土宗独自の念仏法要である。

勅許を得なければ修することができなかったということとは、その当時では、いかに重要な法要であったかがわかる。

また、そのはじめが、現世救済であったことを知る

ことは注意される。

すなわち、念仏は往生浄土、死んでから極楽に行くためのものだ、と短絡的にとらえられがちであった風潮に對して、念仏は現当二世のためであることを強く大衆に訴える教化の必要性を痛感するものである。



月のさやかな秋。収穫の秋、畑仕事が一段落して一年の苦勞が実った秋。

老若男女、寺に集まって楽しいひと時を過ごし、弥陀如来の宝前で、生きていることを喜び感謝し、これから来るべき厳しい冬を元気に乗り越えて、新春を健やかに迎えることができるようにと祈りを捧げたことである。

せわしく現代に生きる人たちに、お十夜の意義を、その昔にかえて考えておし、現当二世、特に現世救済の法要であることを説き、念仏の弘通をはかりたいものである。

偶 感

— 青少年の教育と宗教 —

おおはし えいしょう
大橋 英 正

(淑徳学園高等学校長)

いくらかは低下したようではあるが、最近の調査で、中流意識をもつものの比率が圧倒的に高いと報ぜられていた。従って豊かな社会にあって、知的欲求が旺盛となり、高学歴を望む傾向が増大し、かつまた生活様式の変化が著しいのが最近の状況である。子供の生活を例にとってみても、共用・専用を併せると、子供部屋をもつものが約七割に及ぶという数字が出ている(厚生省、児童環境調査)。毎日新聞はこの報道の劈頭で、現代の平均的

小・中学生像を次のように描いてみせてくれる。

「小学生の時から学習机を持ち、中学生になると専用の部屋でカセットテープレコーダーとラジオに聴き入る……夕食はテレビをみながら食べる。」

このような現在の社会の様相が、青少年の生活環境にいろいろな問題を起こしているの



は周知の事実である。

世上価値観の多様化が問題にされ、種々の論義や解説が紹介されているが、「若者における価値観の多元化は多分に主観的なものであり、むしろ今は戦前以上に価値観が一元化されている」（月刊現代十月号「母親を叱る」東大・木村尚三郎教授）という発言は、硬直しがちなわれわれの考え方に、別の発想の端緒を与えてはくれないだろうか。経済の成長・科学の発達等により、物の豊かさを謳歌して来たのであるが、心の貧困について思い知らされるものである。

青少年の問題行動として、喫煙、登校拒否、家庭内及び校内の暴力の猖獗、暴走族、薬物乱用等があげられるが、これとても、これまで述べてきた事象と無関係だとは言いい切れない。しかし、この問題に関しいろいろの角度から検討されその対策も講じられてきているが、その努力にもかかわらず、抜本的解決がいまだに得られていないのが現状ではない

だろうか。

◎教 育

①幼少年期（ア、乳幼児期 イ、小学校段階）
②青年前期（ア、中学校段階 イ、高等学校段階）
③青年後期（ア、高等教育段階 イ、社会人）と一応分類し、それぞれに応じて目標を立ててはいるが、青少年の教育・育成の場として考えられるものは、まず家庭・学校・地域社会に分けられる。さらに「第四の生活の場」としてマスメディアのつくる世界が示されている（青少年問題研究一三〇号、東京都）。若者を取りまく生活環境が複雑多岐になりつつある証左であろう。

㊦ 家 庭

前の引用の毎日新聞では、「物質面の豊かさ

が改めて裏づけられた反面、親子関係やしつけの面で迷っている親が少なくなない」ことも明らかになったとしている。親の子供に対する期待過剰、父親の無力、母親の溺愛といったことが図式化されて、話題となることしばしばある訳である。注意すべきは、親の子供に対する自己評価が、子供の自己評価より甘い傾向のあることである。

欧米各国の青少年との比較で、①自主性②創意工夫③寛容性④公正さ⑤指導性が低い比率であることが、今後の指導の反省材料となりはしないだろうか。

核家族化、少子化の進む現在、これが因となり縁となつて、親の能力低下や、家庭の機能喪失といった現象がみられるが、大都市の三世代世帯が一割にも満たない現実を凝視する必要があるのではないだろうか。また女性（母親）の就労率の上昇ということも看過できない点であろう。

それはさておき、子は親の鏡とか、子は親

の後姿をみて育つといわれる。いうところは、子供は親のいうことはきかぬが、親のすることはみているということであろう。ある仏教雑誌に室生真信師のことばとして、将棋の升田幸三氏が、山本玄峰老師の後姿に感動されたという逸話が紹介されていたが、充実した後姿には神秘的な何物かを秘蔵されているのであろうか。

(4) 学校

家庭教育にあつては、日常生活のさまざまな経験を通して行なわれるのに対し、学校教育では、あらかじめ決められたカリキュラムに基づいて計画的に行なわれることはいふまでもない。

家庭・地域社会と学校との三者が、その特殊性を互い認識し尊重しあい、本来の役割を果たすと同時に、共通の目標に向つて協力しあう必要がある。また、長期にわたる展望のも

とで、望ましい人格形成に役立つことが大切で、これまで以上の相互連繋の強化が期待されるのである。

校内暴力と受験勉強の弊害解消、また社会への参加を確実にする「グリーン隊」の創設を提唱していたのが目を引いたことを、ここではつけ加えたい。上智大学教授のグレゴリー・クラーク氏の発案で、実社会に対する参加意識と社会に奉仕する義務感を培い、自然と親しみ、からだを鍛える絶好の訓練ともなるという。それが暴力の解消等にもつながるという訳である。

(ウ) 社会

地域の変化に伴ない、年少者の遊びの空間は次第にせめめられつつある現状である。特に大都市にあっては考えねばならない問題であろう。子供たちにとって、必要で意味のある生活圏の不在、自然環境の後退等は深刻な

問題として早急に対応策を講じねばならないことである。

一方環境の浄化の推進も忽せにできない問題である。

第四の生活の場といわれるマスメディアに關しての提言は少ない(青少年問題研究)。

◎ 宗教

意外なことであるが、第五回全国学生意識調査として、全国学生新聞会連合会が行なったアンケート調査をみた(世界日報五・二六)。その中で、「あなたは宗教についてどのような考えを持っていますか」の問いに、否定的回答が僅か八・一%、肯定的回答が七八・一%の高率を示していた。学生が精神的な豊かさを求め出した一つの表われとみられる。これについて、全新連の山口義嗣事務局長の分析として、「宗教について知的、教養的豊かさとい

「観点から関心が高まっている」とのコメントを紹介していた。これまでみて来た青年前期までの動態や傾向と、たとえ一部ではあるにしても青年後期の学生の宗教に対する態度について、一体どう関連させ、どう解釈すればよいのだろうか。

青少年の宗教について論及した文献も余り出まわっているともいえない。(これは筆者が疎いことに起因するかもしれないが……) 年齢別・段階別にすれば、幼少年、青年前期あたりまでは、それぞれ担当の各位の創意と工夫とにより、子供の年齢と環境とに応じた特色ある、宗教色を加味した教育がそれぞれの場において、絶えざる精進を続けられておられることは有難いことと思ひ、感謝とともに今後の発展を希念する次第である。

話題は飛躍するが、最近読んだ本で「月に初めて人間が降り立ったときから、十年間に十二人の宇宙飛行士が月面に立っている。その中の三人までが宗教的な仕事についてい

る」ことを述べていた。心霊科学教会を創立する者、福音主義の教団を立てる者、月面での頻死の経験を通じて、帰国後神にふれる体験をし、宗教運動に挺身している者などである。いうならば、宇宙の神秘と神の啓示により宗教生活に転進した訳である。神の声を聴いた者が三名に及んだという厳肅な事実。科学が発達し、宇宙規模の心構えと考察が要請せられる今日に於ても、宗教的事象は衰えないということ。時代と所とを異にしようととも人間の生活には、本来単なる智性のみでは全き生存ができないもので、そこにそれを超えた心の働き、身のうごきがあることを示唆してはいまいか。なるほど、右の例は万人が経験できないような環境下のものであり、一般の平常生活の経験とは異なっているが、今後の人間の精神生活の将来起り得る一面を暗示していないだろうか。

宗教が無用となるとは考えられないということであり、宗教生活の中にこそ価値ある人

間の生活がうるおいと輝きを増すことになる。とは言え、荏苒無為にそれを待っていてよいものでもなからう。

「平常心これ道」とよく言われるが、一般平均的な平凡な日常生活の中に生れ育くまれた宗教の生活こそが尊いものである。与えられた時、与えられた場所、与えられた諸縁の中で、自分の適性と能力とを見極めて、その全分を社会に投入して報恩の一行たらしめたことの念願である。

先徳の体現し世に示されたものを、真剣に如法にまじめに追体験することこそ、それぞれの存在の意義と価値とを示すもので、自信教人信と同時に、自行、教人行の信行一致の生活の展開が、最初にしてかつ究極のものとなるのではなからうか。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

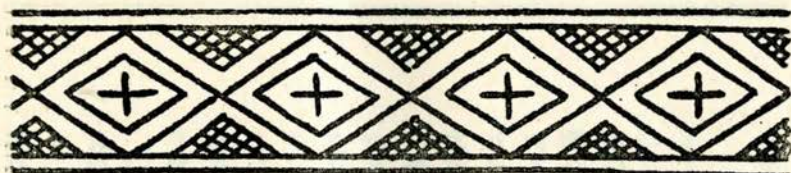
仏教まんが・教育図書

◎子供たちのやさしく、すこやかな成長を願って、大人たちからのすばらしいプレゼントにご利用下さい。

大 道 社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

電話〇三(二六二)五九四四 東京一―八二四七



(一) (口) (法) (話)

故人のための念仏回向

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

阿弥陀仏は挙身から無量の光明を放ってあまねく十方の世界を照らし給うているが、それにも拘らず念仏を唱えている者だけを選びとって撰取し給うている。それなら仏の光明はどのようにして、念仏を唱えている者を撰取し給うているのであろうか。これについて向阿の西要鈔にこんな話がのっている。

「徳大寺の唯蓮房という僧がいて、仏の光明はどのようにして念仏の行者をおさめとり給うのであるかと考えてみたが、どうもよく納得できなかった。そこで雲居寺に七日間の参籠をして祈請をこめたのであったが、満願の日の夜に夢をみた。夢の中で本尊の阿弥陀仏がお手を差し伸ばして唯蓮房の腕をとり、しばらくしてから『おさめとって捨てないというのは、このようなことである』との給うたということである。この話によって成程と心得ることができる。例えば仏は光明というお手を差し伸べて念仏の行者を抱きかかえ、そのまま離し給わぬということであろう。これによって仏の深い慈悲が十分にわれ等の身に及んでいることを、つくづくと思わないわけにゆかない」

そうすれば念仏を唱えている者は、いつでも仏の光明

に包まれながら、仏の慈悲に守られていることになる。

阿弥陀仏は念仏を唱える者の煩惱を滅して勝れた人になりたいとして、触光柔軟の願をたて給うた。そしてこの願を成就し給うたことについて、經典に次のように説いている。

「もし人が阿弥陀仏の光明に照らされ、慈光に浴することができれば、身も心も柔軟になり、その者の貪り、怒り、愚かさの煩惱が消滅し、かわって悦びの心が満ち溢れ、自然と善心が起ってくる。かりに地獄、餓鬼、畜生という悪世界におちて、厳しい苦しみを受けている者があつたにしても、その者が仏の光明に照らされれば、その者の苦しみが休息し、再び苦悩に悩むことがなくなる。そして悪世界での命を終れば、次の世に生れてから悟りを開くようになる」

そして法然上人は念仏回向によって悪世界の者たちが救われることについて、次のように仰せられている。

「亡き人のために念仏を唱えて回向すれば、阿弥陀仏は光明を放って地獄、餓鬼、畜生の世界を照らし給うのであるから、この三悪道に沈んで苦悩を受けている者があつても苦しみがなくなり、その世界の命が終った後で

悟りを開くことができる」

このように念仏を唱えれば己れの煩惱が滅せられて清浄な者となり、念仏を故人に回向すれば、その者はやがて悟りを開くようになるのである。

永観禪師は念仏の功德を数えて説いているが、その中に「念仏の声を聞く者の罪が滅せられる」という功德を挙げている。そうすると念仏を唱えたことによつて罪が減せられ、自分で唱える念仏の声を自分の耳に聞いて重ねて罪が減せられることになる。もしその念仏の声を他の人が聞けば同じように罪が減せられ、故人に念仏を唱えて回向すれば、故人の仏果が増進されることになる。つまり故人のために念仏を唱えて回向すれば故人が利益を受けるばかりでなく、唱えている者自身も仏の光明の中に籠つて守護されながら二重の滅罪という利益を受けることになる。法然上人が仰せられている通りに仏の光明に浴して貪欲が除かれて清浄な人になれるし、怒りの罪を除いて忍辱の人と同じようになれるし、愚かさが除かれて智者と同じようになれる。念仏を唱えてさえいれば、現に幾重にも利益を受けながら清らかな暮しを送ることが出来るわけである。

(最終回)

野島老師のことども



高島昭堂

(金沢市大蓮寺住職)

古都金沢の事など、との仮題を頂いたが、さて何か書こうとすると、兼六園の事、又、前田利家の娘、豪姫の事など、あれこれと考えて居る内に、たまたま昭和二十七年より、同五十五年迄、二十九年にわたり、毎年金沢へ御来錫頂いた、野島宣道老師が、来られる度に、金沢で、いくつかの俳句を残しておられる事を思い出し、又お逢いする度に、さりげなく、布教の事について、ボツボツと話された事等を紹介したいと思ひます。

昭和二十七年十一月、七尾市の西光寺で、五重相伝があつた。その事をもうかがつた時私は、近くの事でもあり、今迄野島老師の五重勸誠を拝聴した事が無いので、此の機会に西光寺へ伺つて親しく聴聞させて頂こう、又その機会に、私の寺にお立寄り頂き、一席の御法話を頂きたいとの由を、老師に相談し、快諾を得た。又金沢の浄土宗の組寺も、これを機会に、夜分、ささやかな研修会を開きたいとの希望があり、五重勸誠のあと、お疲れではあるが、金沢へ御来錫を願つた。

私の寺へ来られた時、門前で、「まことにささやかな寺ですが」と私が申し上げると、「いや、なかなか俳味のあるお寺ですね」と申されたのが、一番最初のお言葉であった。それから毎年、二十九年もの法縁が続こうとは、又五重三回、授戒一回と仏縁があるうとは、夢にも思わなかった。

私の寺でなさった最初の法話の時は三百人位の聴衆があり、昔の事としてパンやお菓子を売る露天商が、本堂の中で聴衆に売った事を憶えて居る。

夜分組寺の会でお話をされたのは、釈尊と羅睺羅の事であった。「沢山の弟子の内、実子羅睺羅に対し、特別な愛をかける事を、つづしまれた釈尊は、一生涯、唯一回しか、羅睺羅と床を並べて寝られなかった。それは、弟子に対し、やはり釈尊も只の父親かと思われる事をおそれられたのか、我が子に対する愛も、弟子、いな一切衆生に対する愛も平等であるとの意を持って、我が子に対する偏愛を、おつしみなされたのではなからうか？ 時変って、我々宗門人は、我が子を弟子として居る現状である。羅睺羅に対して、もっと他人として見る冷静さが、あっても良いのではなからうか」と云う様な内容だったと憶えて居る。その晩は私の寺に泊まれ、丁度中庭に小さい柿の木があり、実が三ツ四ツなつて居た。朝の本堂のおつとめをすまされてから、中庭をごらんになり、左のようによまれたのである。

柿の実に手のとどくべし庭の朝

その次の年からは、毎年五月に、三日間の別時会をする事になった。三日間共、午後一時から夜分へかけての行事とした。それは朝の内、老師と私が、お茶を飲み乍ら、対談する事が出

来たからである。上洛してお逢いしても老師と私とだけで何時間か対談する暇がありません。御招待するならば、それは出来る。それを機会に疑問に思ふ事を質問し、又お教えを頂こうとする私のずい願いであったのかもしれない。

老師は、「布教は局面の打開ですよ」と言っておられた、「普通は、話の構成をつくり、原稿を持って登壇するが、それは以前に作った話だ。お茶も以前にたてたお茶はのめません。今たてたお茶でなくてはなりません。お話も、高坐の上で、聴者と説者とが合同で作り出す可きものですよ」と口ぐせの様に言っておられた。

たまたま老師の布教中に停電となった時も、話をすぐにきり変えられ、光明から暗黒となった時は、何と分別しがたいものか、今迄目があるから私が見て居ると思つて居たが、実は、光のおかげで見させて頂くのであると云う様な話に巧みに展開された。或る日、幼子をつれた人が何人か参った。幼子の一人が泣き出した。其時老師は、来迎和讃のお話をされて居たのです、すぐに、摂取不捨の光明は、念ずるところを照すなりを、子守り歌の節で、うたわれたら、幼子は泣きやみ、すやすやとねむり出し、堂内は静かになりました。此の様な事が、局面の打開なのでしょう。朝は暇があるので、毎回兼六公園へ出かけられました。

旅の目に紫濃しや花あやめ

公園へあやめ咲くとて雨にゆく

昭和三十一年に五重を勤めました。五重ですと、朝から法話があり、毎年の様に、朝の散歩の時間はありません。たまたま夜分になると、「あー今度は一度も金沢の町に出ていないなあ

「、今晚はちょっと出掛けて来るよ」と言われて出かけられましたが、次の朝には机の上に、

短夜の美しき町に出で何買わん

と短冊にしたためられてあった。

真夏の時期に、暁天講座をかねて、授戒をしようと組寺の意見がまとまり、夕方五時から始め、朝方八時頃終了と云う事で、昼間は休みと云う事でした。当然日中は暇がありますので、やはり兼六公園へ、お供をした。本当に猛暑で、緑の葉も、うなだれて居る様な真昼間でした。公園の中央に霞ヶ池と云う池があります。それを昔から近江八景になぞらえて、真中の島を竹生島、池のみぎわにある亭を、浮見堂と云って居ます。「お上人、大分暑い様ですから、池のほとりの浮見堂で、お茶一服頂きませんか」「あーそれが宜しいでしょう」と亭の中へ入った。処が散策の時は気付かなかったが、亭の中へ入ると、池から誠に涼しい風が、そよそよと吹いて来た。お茶を一服頂いて居る間に、池を眺めたら、水の面が、まるで、ちりめんのひだの様に風にゆれている。そこで、老師はささやかれた。

さざなみの立ちて涼しく浮見堂

老師は或る時、「善導大師の半金色は、下半身金色、上は墨染ですが、下半身を下着と見て、上半身を上着と見てもいいのです。中味は金色で、上辺は凡夫の姿です。お説教でも、上辺は凡夫が分る様に平易な話をし、中味は金色の輝くばかりの信仰を秘める事です。上辺が信心深

それで、中味がよごれて居てはなりません。それは清きを濁りに寓し、巧みを拙に藏すと云う事です。色紙と、茶掛けに書いておきますから、座右の銘にしなさい」と云われて揮毫なされ、「話は巧さが表に出ては、いやしくなります。ポツポツとたどたどしく語りながら、そこに巧みさがかくされて居なければなりません。」

七月の始めに来て頂いた事があります。その時は豪雨があり、梅雨明けだったのでしょう。

浅野川大出水して雷雨去る

やはり十一月になった年もあります。十一月四日の十夜の昼の席が終った頃、「兼六園へ紅葉を見に行きましょう」との事で、老師と私は、全山紅葉の公園を予想して出掛けたのでした。処が公園へ行つて見ると、紅葉はまだ青葉で、時期がいささか早かったのでしょうか。しかしその緑の中に只一本のはぜ紅葉があり、その朱の色が一きわ美しい事でした。

一本の只一本のはぜ紅葉

と云われた老師は、「全山紅葉を想像したのは私達の主観です。しかし現場に行つて見れば皆青葉で、しかしその中只一本だけのはぜ紅葉だけある。それは客観です。主観にとらわれて、見事な客観の大自然を見落しがちです。緑の中に只一本のはぜ紅葉と云うのは、人間の考えを超えた、自然のいとなみです。そのいとなみの中にこそ、美しいものが秘んで居るのです」と。その年は五月に来錫出来なかったのは、何かの事情があったのでしょうか。

をくれ来てあわれ身に泌む事ばかり

金沢の私の寺へ来られて二十年を迎えたのが昭和四十七年でした。丁度五重を勤めましたので、その中日に、巡錫二十年、五重三回、授戒一回記念に句碑を建立しました処、

せめてかくいうべかりしに日短かし

昭和五十四年五月には、色々箱書やら、色紙を書いておられ、丁度そこに半折の紙があったので、その場で、

此寺にことしも掛けし初夏の錫

と書き染められ、「実は梅雨の錫にしたいんだけど、掛けた書、初夏の錫の方が明るく感じられるかな」とつぶやかれ、次の年の昭和五十五年に表具し床に掛けておきましたら、大変悦ばれ、第一席は、掛錫についてのお話でした。昭和五十六年は四大不調となられ、別時会も中止となり、同年七月十五日、お盆の日に老師は極楽へお帰りになりました。命終る迄ベットの上で、ポツポツとお説教をなされて居たそうです。

二十九年の間毎年来錫なされ、古都金沢を愛されて、いくつかの俳句を残して行かれた事を偲び、古都金沢を書く可きなのに、野島宣道老師の目を通じての、金沢となりました。



お十夜風物誌(下)

—勝ち鬨念仏の寺—

しばたむつごろう
柴田六五郎

「つるべ落とし」と言われる速い夕陽が比叡の山なみに掛ると、もう足もととはほの暗い。バスを降りた人々もふとその足もとの覚束なさに驚くのであるが、その頃には門前、境内に櫛比した露店、屋台に一斉に灯がともる。長いコードを引っ張って裸電球をさげる店は一割もあらうか。殆どの店頭は、カーバイトの青白い炎を小さく交差させるアセチレン灯である。そんな中でサーカスのテントの前だけは一きわ明るく華やかだが、対象的なのは境内の片隅、まだこんな空間が残っていたのかと驚くばかりの片隅で、小さなテーブルに載せた手相見の提灯のまたたき。それでもこの大小雑多の光の中に本堂の太い柱の数が読まれ、鐘楼の美しい姿が浮かび上るのだ。夕

餉時一寸人波の退いた寺の境内は、此の頃から更に大きな群衆に沸きかえる。参詣人の殆どが通る北門(裏門)の前、右手には二抱えもあらうかと思われる松の古木が、道を掩うて枝を拡げる。その下に店をはるのは外郎屋、「さあー買った買った五色のういろ! 極楽の池に浮かぶは五色の蓮、青と黄赤、白と黒、蓮の色になぞらえて、安土名物五色のういろ。極楽往生した上は、蓮の台でうたた寝の、夢かまことか知らねども、夢がさめたらまづ一服、五色ういろのうまいこと、こいつだけはいけ合いじゃ。これから浄厳院さんで、なんぼ遊んで帰っても、帰りの土産はこのういろ、爺ちゃん婆ちゃんごきげんで、ナンマンダブツとブツクサの小言も忘れて飛び

つくういろ、さあー買うた買うた、五色のういろ」と威勢よく喚きたる若い外郎屋の向いでは、安藤の飴屋が、銅の大鍋に炊きあげたばかりの飴を手早く目八分に固定した太い竹にひっかけた。飴の大き塊はじんわりと垂れる、それを又ひょいと竹の上にひっかける、垂れる、ひっかける、垂れる、ひっかける、と、五六度同じ動作を繰返すと飴の色が少し不透明になる。こうなると次は垂れるのを待たずに、力を入れて引っ張る。掛けては引っ張りを何度か繰返した彼は真っ白になった飴を一塊に無造作に丸めてメリケン粉を撒いた広い仕事台の上にとんと落すように置く。妻君が準備した赤や青の色粉を溶いた小皿に、指先で一ちぎった飴を染めるとすーっと紐のように引き伸ばし、その二三本を一つかみの飴に包んでコロコロと台の上を転がせば出来上り。二〇工程の捧飴は何処を折っても恵比寿と大黒の顔が出てくる。「サーア、サーア出て来た、出て来た、恵比寿さんと大黒さんだよ。恵比寿さんも大黒さんも一本三銭。恵比寿さんと大黒さん二本入りなら一銭まけての五銭」妻君が金切り声をあげている間も、安藤のおやは、足もとに置いたコンロで、固まりかけた飴を戻しながら黙々と

仕事を続ける。次に作るのはお多福か？ モデルは彼の妻君にちがいない。

次第に増える人波に押されて門をくぐると、参道の両側にびっしり露店の屋台がつづく。どの店も申し合せたように赤い布の上に品物を並べている。おもちゃ屋の店先は何と言っても一番賑かだ。花火、ビー玉、ペーゴマ、メンコ、ブリキ製の金魚や如露、ままごと遊びの道具、セルロイドのキュービー人形や花のついたヘアピン、ゴムで作った蛇やとかげ、竹の蛇や鉄砲。お面は赤鬼、青鬼、般若面、お多福、金時、桃太郎等昔話の主役たちがずらりと並ぶ。日光写真、活動写真のよろしく人や馬が駆けるハンドル操作の影絵、べったりと睡で貼りつける写し絵。木製の鉄砲はキルクの弾丸がひもつさで三〇センチ程しか飛ばないが、子供たちに一番人気があるのは煙硝を鳴らすピストルである。連続して撃てる廻転式と単発式、単発式はめんどうだが、音は比較にならぬ程大きい。けれども、ピストルと並べて売っている刀を一本腰にぶち込んで戦争ごっこをする時は連発式が似つかわしい。どっちにしようかと店さきで迷っている子供の耳に、もう他所の子の喊声とパンパンパチパチが

ひびいてくる。隣りの店は本屋である。猿飛佐助、忍術自雷也、石童丸、坂本竜馬、壺坂靈驗記、道成寺等、極彩色の表紙をめくってみても、中は墨一色の挿絵の隙間にびっしり刷り込まれた変態仮名、こんな本は近頃読者も少いらしく、五、六冊束ねて十銭で売っている。その次の金物屋は近くの八日市からの出店で、これは観音堂前に店を仮設する事に昔から決っている。その他安土、八幡、武佐等地元や近郷の出店は勿論、遠くは天津から出張する昆布屋も定位置をもっており、又それだけに人々の信用もあつた。さて八日市から出張った金物屋は、百姓や田舎の一般家庭に必要な鎌や鋸、包丁、金網、鉄、ペンチ、釘、金槌などは勿論、鉋、鑢、銅線、針金、鋸など一寸した大工道具も店に出している。〃浄敝院参りに行ったら何でも有る〃と人気のある店の一つである。その前がうどん屋。形ばかりの客席は、戸板のテーブル二板と床几四脚、ゆずり合えば十四・五人は掛けられよう。素うどん、きつね、天ぶらうどんの三種類。とは言ふものの天ぶらなどと言える代物ではない。パラッと撒いた搔上げに、箸の先ほどの蝦の尻尾がチラホラ混じっているばかり。食事刻を過ぎても四、五人居据っ

ているのはよほどの飲み助であらう。〃敵一俵〃などと聞こえてくる濁声は、この秋法要が終るのを待って始まる取り入れの話か？ 天津甘栗、鯛焼、飴屋、飴屋の店先の五厘玉は一個口に入れたら、口一杯で物も言えないほど大きい。カルメ焼、綿菓子、端布屋、糸屋、射的、昆布屋、くだもの屋。みかんもリンゴもまだ青い。柿だけは漸く旬の色だが、この辺りは、どこの家にも柿の木的一本や二本はあることとて売れゆきは芳しいとは言えない。大人の拳ほどもある石榴の割れ目から、赤く透明な実が覗く風情は、見渡す限りの黄金の穂波と共に、秋の気配を胸の奥深い処まで送り込んでくる。駄菓子屋にはニッキ水、生姜板、ラムネ、みかん水、竹ようかん、豆板。饅頭焼く手許を、あたかも手品でも見るような好奇と感嘆の想いでを見つめるのは太鼓饅頭。千枚通しの先でクルリと裏返す巧みな呼吸と、旨そうな匂いについて我を忘れて「ホラ坊ん！ 涎たれとるやないか」と、饅頭焼くおやじに笑われたりする。十分程で仕上げるという早撮り写真は、テント張りの中にカメラをセットして客を待つが、年頃の娘たちが上得意である。滅多に着ない晴着だから写真を撮るのか、写真を撮るために晴着

を着てくるのか、兎に角縁談の、お見合用の写真である。マグネシウムの青白い閃光は絶え間なく、テントの隙間から夜空を截る。八幡名物の外郎や丁稚ようかんの老舗「わた与」は例年通り鐘樓の前に店を構え、竈を据え、蒸籠も枘も材料も一切合切運び込んでの製造販売で、八幡から運んでは追っつかぬのである。「浄敝院参りどすさかいに」と、嫁いだ娘の里帰りは本人と孫だけという訳にもゆかず、「聲はんも親御はんも」と親類呼びのお愛想や土産に作っても作っても足らぬ外郎と丁稚ようかんである。商人の呼びこみ、売りこみ、迷い子の叫び、娘達の嬌声、酔っ払いの濁声、見せ物小舎の呼び込み口上、覗きカラクリのリズムを打つ竹の音。そんな雑音の渦を包み込むように本堂から流れる多勢の僧の読経の声も、一段と調子をあげたジンタの響きに掻き消されてしまう。光と噪音の渦は大御堂をめぐるって何時果てるとも思われぬ。「えらい人やなあ、一千五百か？」私の問いかけに「いや。もっと出てまっせ。三千人近いのちがいますか、最後のお通夜でっさかい」肩をぶつつけて一緒にままれながら警備員の北川君が答えた。

翌る十二日午前五時、東天紅にはまだ間がある暁闇の

静寂を破って鐘樓の梵鐘が股々と響き渡る。丑満の頃まで烏鷺を聞わせていた老僧も、般若湯に酔いつぶれた若僧も、ガバとはね起きて洗面所に急ぐ。書院に調読を終えた五十名近い僧が、貫主の高山竜善師を中心に静々と渡り廊下を本堂に進む頃、東の空が漸く白みはじめる。弥陀経、礼讃行道、御回顧の終るのを待ちかねたように勝ち鬨念仏の最初のジャンが入る。天正七年五月二十七日、この本堂で行われた法華宗との宗論に勝った浄土宗の僧俗が、手に手に持った太鼓と鐘を乱打して始めた念仏の大合唱がその濫觴という激しいリズムが、ドンドンドンドン、ジャンジャンジャンジャン、ナンマンダーブツナンマンダー、ナンマンダー、ナンマンダー、ナンマンダーと次第にピッチをあげながら、今日から刈入れの始まる稲田の上を流れてゆくのである。

(附記)

およそ五十年前に遡ったレポートである。その殆どはもう忘却の彼方にあるが、地域住民の生活と深くつながった法要の記録である。

エッセイ

卒業式前後 (三)

—— シーモアの朝 ——



朝四時になると、私は自然に目が覚めてしまふ。女房と娘は、うちのお年寄りは……と笑うが、長年の習慣だから変えようがない。これはアメリカ旅行中も全く変らなかった。

イエガー家に着いた翌日から、私はカメラ片手に、裏口からそっと夜が明けたばかりの戸外へ抜け出すのが日課となった。誰にも邪魔されずに散歩を楽しみ、まだ数多く残っているであろう自然を観察するためである。何度か来ているから土地鑑はあるし、散歩に支障を来たすものはなに一つない。ただ一つの

木の^き下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

(随筆家)

煩わしいのはスクランブルをかけて来る飼犬で、足元まで来て吠え立てるが、分を弁えていて、自分の守備範囲をはずれると、あっさり引揚げて行く。犬にしてみれば胡散臭さを感じると同時に人恋しい気持もあるのだろう。なにしろ家人以外の人間に接する機会が殆ど無いのだから。それこそ何年かに一度やって来て、朝っぱらからブラブラ歩きをする物好きな日本人に、頭の一つも撫でさせてやろうかなとも思うが、どっこい、そうはいかない俺もアメリカの犬だ、ブライドが許さん

——姿形は変っていても、犬たちは一様にそんな目つきで私を見るのであった。シーモア滞在中に私が仲良くなったのは、牝のシェパード一匹だけであった。

午前四時二十分。日の出にはまだ少し間がある晴れ渡った空に、はや飛行機雲がすうっと音もなく伸びているし、清澄な空気を震わせて無数の小鳥が囀っている。半袖シャツでは少し肌寒いが、ままよとばかり前庭の芝生を突切って、Sycamore Dr. (シカモア通り)と名付けられた通りへ出る。しとどに降りた夜露で、忽ち靴はびっしょり濡れてしまった。通りの両側には芝生の前庭を置いた瀟洒な家屋が並んでいる。閑静な住宅地である。その通りを百米も行くと、東西に一直線に伸びる鉄道線路(アメリカの最古の鉄路。いまは貨車専用)に沿った幹線道路に突き当る。通勤にはまだ早く、この時間さほど交通量は多くない。

鉄路の土堤に点々と白い花が咲いている。

遠目にも日本では見かけない花なので、確めてやろうと思うが、交通量が少ないとはいっても道路を横切るのはなかなか難しい。大袈裟に言えば命がけである。コンボイと呼ばれる大型のトレーラーが通ると、かなり離れた所に立っていても相当な風圧を受ける。すぐそばであの風圧をまともに食らったら、薙ぎ倒されるか巻き込まれてしまうかのどちらかであろう。ま、それはともかくとして、土堤に咲く花は、五弁の可憐な花で、えもいわれぬ芝香を放っていた。どんな匂いと聞かれてもちょっと形容し難いが、強いてあげれば、えごの花の香りに似ていないでもない。一夜花で午前中に凋んでしまう。花の生命は短くて——である。この花、鉄路の土堤でしか見かけなかったところを見ると、貨物に着いて遠くから運ばれて来たものか? 日本でも是非殖してみたい野草の一つである。

シカモア通りを引き返し五百米も行くと、小川の橋の上に出る。覗き込むと、流れのそ

こかしこに小魚が群をなして泳いでいる。せいぜい五、六厘の大きさで、それより大きい魚の姿は見られない。どこかに潜んでいるのであろう。家庭からの生活排水が流れ込まないせいか、水はきれいである。

どこまでがシカモア通りだか判然としないが、橋を渡ると道は小さい牧場を分断して畠を抜け、真直地平の彼方へ消えている。左手遠くにある森と、右手はるか地平線上に朝日を受けてキラリと光るサイロらしき物を除けば、目路の限りは黄土色に霞む麦畠とまだ黒い地肌を見せている玉蜀黍の畠で、一軒の民家はおろか一木すらもない。

「やれやれ」

と、ひとりごちてみたものの、あとの言葉が続かなかった。広いなあ——と言ってみたところで、徒に空虚に響くだけである。

「やれやれ」

もう一度呟いて、

「そう思わないか」

と、柵のそばまで近寄って来た一頭の牛に声をかけた。西部劇でおなじみの角の無い牛である。頭が来ると、次々に七、八頭集まって来た。スクランブルをかける犬同様に、よほど人間が珍しいらしい。頭の天辺から爪先まで、あのギョロツとした目で、しかも集団で見つめられると、いくら柵を隔てているとはいえ、あまりいい気持はしない。牛共の表情をカメラにおさめて、早々に退散する。

「じゃあ、元気でな」

橋の手前で右に折れて、小川の土堤道を行く。柳や檣に似た灌木が両岸から川の中へなだれ込むように生い茂っているので、川面は見えず、せせらぎだけが耳に心地よい。螢でも住んでいそうな川である。(あとで聞いたら、螢のシーズンとは半月ほど前に終わったというところであった) 灌木の下草は、牧草が野性化したイネ科の植物がすでに穂を垂れており、そのところどころに夏薊が花をつけている。かつて道の右側に拡がっていた牧場はいつの間

にか玉蜀黍畠に変貌していた。十五糎ほどに伸びた苗がそよ風に吹かれて、いかにも頼りな気である。発芽時の長雨と低温で成育が遅れているということだが、これで秋には収穫出来るのだろうかと他人事ながら心配になる。いや、他人事ではない。アメリカの穀物の収穀の多寡は忽ち日本に影響して来るのだから、丈夫に育ってくれよと祈らずにはいられない。

日が高くなるにつれて急速に温度が上昇して、畠一面から水蒸気が立ち昇り、淡い霧がたなびく。立ち止ってそれを眺めているうちに、ふと、何物かに見られている、と感じた。蛇か？と思うと、さあっと背筋が寒くなった。爬虫類の中で、私は蛇が一番嫌いなのである。蛇か？ いや違う……身をこわばらせて自問自答しながら注意深くあたりを見廻すと、五米程先の路傍に野兎が一匹黒い目をキラキラさせてこちらを見ていた。微動だにしない。なんだ兎かと思うと、一遍に全身の

力が抜けてしまった。兎は意外に小さく、耳も短くてまるまっちい感じで、なんとも愛くるしい。そろそろカメラを向けると、シャッターを切るより一瞬はやく、ピョンと跳んで土堤の茂みの中へ隠れてしまった。

帰ってから、ひろみに、

「ピーター・ラビットに会ったよ」

と言うと、

「袖の長い上着着てた？」

と、すぐ乗って来た。ここで「ああ、お前によろしくって」とでも言おうものなら、親子の馬鹿話は際限なく続くことになるので、ニヤッと笑って終止符を打つ。

一体こいつのこういうセンスはどのようなようにして培われたのだろうと、時々考えることがある。それとも天性なのか。童話を書かせれば、私よりもずっとファンタジックな物を書く。ただ、いまのところ本人に書く気がないから、傑作を世に問うまでには至っていないが……。

日射しが強くなった。プラタナス風の大樹の木陰にデッキチェアを出して、久し振りに父と娘だけの対話を楽しむ。

「庭の隅にリンゴの木があるの知ってる?」

「ええ。いくつか青い実が落ちてたわ」

立ち上ると、ひろみは二つ三つ落ちていた実を拾って来た。

「日本でインドリンゴと呼ばれているのがこれなんだな」

近頃、東京でもあまり店頭で見かけなくなつたから知らないかと思つたが、

「ずっと昔、一度だけ食べたような気がするわ。緑色で割合縦長の……」

と、記憶にはあるらしかった。

「俺たちの子供の頃は、最高級のリンゴだったんだが……。インディアナリンゴがいつの間にかインドリンゴになってしまったんだな、日本人てのは省略好きだからね」

勿論私の知識は新聞か雑誌で仕入れたものである。ひろみの手から実を取り上げてつく

づく眺めていると、ひろみが言った。

「いまなに考えているか当ててみましょうか。味噌漬か粕漬にしたらうまいだろうな」

――

凶星であった。

「西瓜なんかよりいけるかもしれないな」

そんなことを言いながら、私はカリカリとした歯ざわりを想像していた。

「朝食までの間、苺でも摘みませんか」

と、イエガー氏がやって来た。

「苺摘みか、いいですな」

家庭菜園の一面に一坪半程の苺畠があつて、イエガー家で使うジャムもシロップ漬も、すべてここで採れる苺で賄われているということがある。いまが最盛期らしく、小粒の苺が沢山熟れている。中には細かい砂に埋もれて熟しているものもある。この細かい砂状の土壌が、アメリカ中西部の穀倉地帯を形成したんだと、何故かその時私はそう思った。ではこの土壌はどのようにして出来たの

か……よそう、よそう、そんなことは地質学者の考えることだ。

「ビーナッツを作るといいですね」

砂を手で掬って、指の間から落しながら私が言うと、

「ビーナッツ?! ビーナッツはミスター・カーターに任せとけばいい」

と、イエガー氏は笑った。

「シカモアってなんですか?」

唐突だとは思ったが、さっきから頭の隅に引掛っていた疑問を口に出すと、イエガー氏は、

「木の名前ですよ」

と言うと、私の手を引張って、デッキチェアに置かれている木の前に立たせた。

「これがシカモア。これがチューリップツリー」

と、隣の木の幹を叩いて言った。

「丁度、いま花が咲いている。これはインディアナ州の州木だね」

なるほど、うす緑色した肉厚のチューリップに似た花が咲いている。

「これがスイートガム」

イエガー氏はそのまた隣の幹を叩いた。

しかし、私にはみな同じように見えて、結局はプラタナスで総括する以外には手がないという気がした。だがこれはあながち見当違いではなかったようである。イエガー氏からプレゼントされた「インディアナの木々五十種」というパンフレットにも、AはBに、BはCによく似ているという記述があるから、説明の仕様がないうのかも知れない。

「シカモア・ドライブというのにはシカモアが沢山生えている通りという意味ですか?」

「昔、このあたりはシカモアの林だったんですよ。木も少なくなりましたよ」

イエガー氏は往時を偲ぶように目を細めた。

木陰を出ると、太陽がじりじり肌を焦す。今日もまた暑い一日になりそうである。(続)

浄土句集

一田牛畝選

評 年を取れば優しくなり、朝夕仏前に頷き朝は希望、夕は感謝の気持となつて、手を合せて暑に耐ゆる気持となる。

八月の吹雪アルプス征服す
福岡 原 敬二郎

香水をして外出の準備出来
福岡 前田 秀峰

母の忌に夏草茂る故郷へ
東京 末常てる子

評 欧州の旅でアルプスの八月は吹雪いていたとのこと。さぞかし楽しかったことであつたに違いない。

評 着物も着た。帯もしめた。最後に香水をして外出の準備は出来た。下駄をはいて、日傘を開き「行つて参ります」と。

評 母の忌となつた。故郷は汽車に乗つて行く田舎らしい。そこには幼い時に遊んだ夏草が茂っている墓があつて懐しいに違いない。

撞き初めの鐘悠々と秋の寺
福岡 行正一如子

朝食の卓に朝顔一輪を
東京 真野よし子

行く秋やたよりたよらん老夫妻
京都 岩井 伏水

評 作者は九十三歳の老いて猶矍鑠たる老僧で、本堂の縁先に鐘を吊り朝夕撞いて町人の覚りの鐘として有名であつたが、この度鐘樓が落成し撞き初の大法要が行われ、沢山の人が参詣し盛大だった。

評 朝食の準備は出来た。朝顔一輪摘んで来て、コップに水を入れて差して、朝食の合図をする。すがすがしい気持ちがいばいで、さぞかし食欲をそそることならん。こんな家庭はさぞかし楽しさが盛りあがつてゐるらしい。

朝夕の読経どきぎょう一途に暑に耐ゆる
福岡 服部 光代

教誨の一つ参加の盆踊
大分 丹羽 難中

東京 栗原やえ子

福岡 権藤みきお

福岡 行正 明弘

いと小さき灯籠手に手に地藏盆

御隠去も盆は一役棚経へ

棚経の沙弥拙なくも真剣に

東京 田中 秀代

長野 友洲袈裟雄

福岡 釈河野ねはん

日盛りやいらだち佇てる踏切に

展がるる宇宙科学や夏の日

新調の麻白衣着て棚経へ

福岡 林 澄山

三重 山田 歌甫

福岡 安藤平次郎

新しき角塔婆建て川施餓鬼

濠に浴いめぐる城跡秋日午

単線のほとりに咲ける茄子の花

福岡 荒牧 還愚

福岡 上滝津弥音

福岡 木下富士女

伸びきりし木賊の先に蜻蛉ゆれ

名利の広き寺苑に蜻蛉翔ぶ

駐車場狗尾草の片隅に

東京 猪瀬 幸子

東京 大野いく子

福岡 田代 葦女

かさかさと夜も落葉の散る音す

三九師へ御恩心の盆の経

放生の御経頂く子亀かな

東京 真野 竜

群馬 島津 か寿

福岡 稲永美恵子

鯛や黒衣の僧の袈裟軽き

昼ちろる部屋より庭へおくり出す

新盆の母に土産団子持ち帰す

東京 吉原登起子

山口 上野 明達

新米の仏飯高く盛りにけり 一田 牛畝

夏帽子買いて旅装の整いぬ

墓施餓鬼合鉢の音や暑氣払ふ

東京 小笠原香祥

東京 吉田ゆきゑ

名僧の修行窟跡夏木立

朝市の姉さんかぶり葛の花



『念佛ひじり三国志』

—法然をめぐる人々—

◇◇◇寺内大吉先生に毎日出版文化賞!!◇◇◇

—長い間の連載、本当に御苦労様でした……—

永い間『浄土』誌に連載された寺内大吉先生の大作『念佛ひじり三国志——法然をめぐる人々』が、毎日新聞社より全五巻の大河小説として完結発刊されていることは、本誌で

もたびたびご広告申し上げている通りです。ところでその寺内先生が、このほど毎日新聞社より昭和五十八年度「第三十七回毎日出版文化賞」を受賞されることになりました。ま

ことに慶ばしいことで、誌面をお借りして、ここに心よりおめでとうございますと申し上げます。

賞の対象となりました『念仏ひじり三國志』は、昨年の十一月より毎日新聞社から刊行され、この八月に全五巻をもって、見事完結いたしました。思えば『浄土』誌に連載が開始されたのは、昭和四十九年（『浄土』四十巻）五月号からで、本年昭和五十八年（『浄土』四十九巻）六月号において、百九回の長期連載をもって最終回を迎えたわけです。この間、法然上人讃仰会の創立四十五周年記念事業としての特集号ということで、昭和五十五年（『浄土』四十六巻）十一月号だけは、寺内先生に「『念仏ひじり三國志』ノート」という一文を頂戴いたし、連載を一回休んだわけですが、そのほかは一度も休筆されることなく、『浄土』の誌面に充実のページを与えていただいたわけでした。一回の原稿が、四百字詰用紙二十五枚ほどですから、全体では四百字

詰用紙二千七百枚にも及ぶ大長篇小説となつたわけです。もちろん出版にあたつては、『浄土』編集子のミスにより誤字や脱字の多くあつた連載原稿が、大幅に修正加筆されての決定稿となつたわけで、連載を続けながらの寺内先生のご精進はまことにたいへんものでございました。

ともかく全五巻上製箱入りのセット発売となりました『念仏ひじり三國志』の豪華版本は、雑誌連載の成果を、大きく刷新して、法然上人をめぐる人々が生き生きと活写されて、念仏信仰をすすめて行く私たちに大きな勇気づけ、力づけとなる感動の歴史小説となつたわけです。

寺内先生、永い間の連載本場にありがとうございました。そして本当におめでとうございました。今後また『浄土』の誌面に力作を頂戴いたしたく、読者共々、首を永くしてお待ち申し上げる次第です。本当におめでとうございました。

（K生）

(仏)(教)(行)(事)(一)(年)

十一月の行事

——冬至と大師講

驚見定信
わしみ じょうしん

地域や気候の違いがあつたにしても、十一月になると収穫は終えている。収穫のテーマが十一月の行事の基礎部分をなしているのは、ほぼ間違いないところであろう。他方十一月は冬至である。冬至冬なか冬始め、といわれるように、冬の真最中にあたる。太陽の光が弱まるときでもある。農耕にとっては太陽は豊作のシンボルである。太陽のおとろえは、農耕の危機である。人々は太陽の復活を心から願つたこととおもえる。太陽が蘇みが

えることは、新しい生命の生れることと同義である。方法は一つしかない。神々を迎えて、これをまつり、願いを託すのである。そうした現れの一つが^{オオイッ}大子信仰である。冬至が重要視されているのは日本だけではない。金枝篇には古代ヨーロッパの冬至の祝火についての記述がある。また『ヨーロッパ歳時記』（植田重雄）では、「北欧では、太陽が悪い狼によってしだいに喰いつくされ、闇が支配するようになってゆくと考えられた。その

ために、太陽に熱と力を与えるべく、大きなかがり火をたくさん焚いて太陽の蘇生を祈った。冬至は、この太陽がふたたび新たな生命を持つ出発点となるので盛大な祭をもよほしたのである」

という。クリスマスは、キリストの誕生を祝う日であるが、当初は必ずしも一定していなかったようである。

「キリストの誕生を祝う日をいつにするか、教会は長い間模索してきたが、「世の光」(ルクス・ムンディ)としてのキリスト神を祝う日は、この新しい太陽の誕生を祝う冬至の日がもっともふさわしいと考えられたのである」

冬至は太陽の復活の儀式が行われたときであった。このことは日本だけではなかった。広く諸民にも共通のことのようであった、とみてもよいだろう。冬至は太陽の運行によっている。多く民族にとっては、太陽の運行による時間のはかり方、季節のとり方は最も基本的な方法であったろう。しかし、それにもまして太陽の光が人間にどれほど多くの恵みをあたえてきたかを知っていたのである。

十一月の行事ガイネを主とする収穫の感謝という要素

と、新しい生命の復活という要素が基底にあって構成されてきた、とみてはば間違いない。

収穫のまつりは新嘗祭に端的にあらわれている。辞典からひいてみよう。

陰曆十一月の卯(ウ)の日にその年の新穀を天地の神々に供え、天子みずからも食し、臣下にも賜わる式典、明治以降、この日を十一月二十三日とさだめ、国の祭日とし、即位の年の「大嘗祭(ダイジョウサイ)」といい、天皇一代に一度の大祭とする。現在は「勤労感謝の日」として国民の祝日の一。(新潮国語辞典)

以上のように、説明している。新嘗祭とは新穀を神に供えることを目的とした祭であることがわかる。事実上は官中や神社での行事はそれぞれ伝統的な方法をとっており、期間も一日で終ることはない。しかし基本的には神々への収穫感謝であるとすれば、民間にも多くの習俗をみることができる。代表的なものは、アエノコトである。田の神送りの行事である。

一般的には民間での収穫祭は、穂かけ行事と刈りあげ

行事との二部構成となつてゐる。穂かけ行事は、稲かりに先立つものであるから、ほぼ九月頃を中心とした行事とみることが出来る。刈りあげ行事は、稲かりの後である。大体十月から、遅いところで十一月にわたることがある。これを、九月クニチ型、トウカンヤ型、イノコ型、霜月丑の日型、アエノコ型の五つにわけたのが伊藤幹治氏である。これらの類型の名称をみただけでも地域によつて月が異なることがわかる。

収穫祭の期日や形式は異なつても、基本的なモチーフはまったく同じである。田の神に収穫物を供え、そして田から山や家の内（種俵や納戸等）に神様を送りかえすことにある。

こうした心情は劇的な形をとつて伝えられてもきた。常陸国風土記によれば、神祖の尊が諸神をめぐつてゐたとき、富士の神は新嘗の日であるから潔斎してゐるためにおとめすることができません、とことわつた。しかし筑波の神は、新嘗の日ではありますがおとめしなう、と飲食をもうけて神祖の尊をとめた。それゆゑ富士山は雪におおわれ、筑波山は多数の人々がつれだつて山に遊び憩う人々が多いのだと書かれてゐる。

新嘗の夜は物いみの日であつたことがわかる。そしてまた訪れる神に接待をする日でもあつた。こうした伝承は^{オホイ}大子信仰にも多くみることが出来る。とくに民俗的行事としては大師講に明らかである。

大師講とは、旧暦十一月二十三日夜から二十四日にかけて、東北・関東北部・中部や山陰地方などに広く伝承する行事……各民家で小豆粥や団子を作つて、ダイシサマ・デシユサマに供える。この夜、ひそかにダイシサマが身なりを変えて訪れて来るので、これを家の内に迎えて入れて接待する……。〔民俗学辞典〕

大師講というダイシとは通常、聖徳太子、弘法大師、元三大師、智者大師などがあてられてゐる。しかし現在のところでは大師は大子（おおいご）、つまり「貴いマレビトで、恩恵を民衆に与えにくるもの……」（民俗学辞典）であつて、仏教の浸透とともに新たな色づけが行われたとの見方が優力である。しかし大師が大子かの違いがあつても人々を訪れるときは実体は隠されてゐる。異形の者の形をとつてゐることさえある。年中行事辞典には、

「おだいしさまは、搗粉木のような足をした一本足の神様だという所が多く、子供を大勢連れだ貧しい女の神様のようにいつている所もある……」と載せている。

ダイシが高僧であり、また異形のものであるという違いは何を伝えようとしているのだろうか。

五来重は、新穀をまつる新嘗の夜に、子孫を来訪する祖霊の、靈威にみちた畏怖的表象であつたといふことができよう、と解析している。

神聖なる存在は、神聖なるがゆえに異様な形をとるのである。

訪れる神は祝福をあたえる。その祝福とは生命力の更新である、と基本的にはいえるであらう。また別のいい方をすれば、神や祖霊に対し、感謝をする日でもある。こうした点からみれば現在の祝日である「勤労感謝の日」とは、働く人のための感謝マツリという意味よりも、働く人が主体となつてカミや祖霊に感謝をする日、と考えられそうである。

村瀬 秀雄 著

『好評三刷』

『全訳法然上人勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

『好評重版』

『和訳浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和訳法然上人選撰集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和訳善導大師観經四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和訳善導大師六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

◆◆◆『浄土句集』欄への投句のお願い

—及び俳文等の寄稿のお願い◆◆◆

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、『浄土句集』欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生
の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に
富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させ
ていただきます。

さて、この『浄土句集』欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願
いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに
衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

一、内 容 俳文、句会便り等の随想

一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度

一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会

◎ 読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。が、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思ふことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十九巻 十一月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十八年十月二十五日 印刷
昭和五十八年十一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

待望の本格八仏教／歴史巨篇！

毎日新聞社から好評のうちに全五巻発売中！！

念佛ひじり三国志

―法然をゆるる人々―

寺内大吉 著

四六判・上製 全五巻（各巻定価一三〇〇円 千各二五〇円）

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

第三十七回 毎日出版文化賞受賞

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一

振替（東京）四一五六五三四

第四十九巻

十一月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和五十八年十一月一日発行